

科学研究費助成事業（科学研究費補助金）研究成果報告書

平成25年 5月 20日現在

機関番号：12301
 研究種目：若手研究（B）
 研究期間：2010～2012
 課題番号：22792171
 研究課題名（和文） 血液透析患者の食事管理に対する態度尺度の開発と信頼性・妥当性の検証
 研究課題名（英文） Development of an attitude scale in dietary managements of hemodialysis patients and reliability-validity vilification of such scale
 研究代表者
 恩幣 宏美（ONBE HIROMI）
 群馬大学・大学院保健学研究科・講師
 研究者番号：20434673

研究成果の概要（和文）：

本研究の目的は、維持期にある外来血液透析患者の食事管理に対する態度を測定できる尺度の開発および信頼性と妥当性を検証することである。

血液透析患者の食事管理における態度を明らかにするためにエスノグラフィーを実施し、カテゴリーの関係性を検討した結果、8つのテーマが明らかとなった。

現在、質的研究を基に、血液透析患者の食事管理行動に対する態度尺度を開発している。尺度は、全部で39の質問項目がある。

研究成果の概要（英文）：The aim of this study is to develop a scale to measure hemodialysis patients' attitude toward their dietary management, and to investigate the reliability-validity of such scale. In order to clarify the attitudes of hemodialysis patients on the dietary managements, vital data was collected through ethnographical research. By categorizing the results, we found eight themes to be clarified. Based on this ethnography, we developed the attitude scale for the dietary management actions of hemodialysis patients. A questionnaire developed to measure by this attitude scale consists of 39 questions.

交付決定額

(金額単位：円)

	直接経費	間接経費	合計
2010年度	1,600,000	480,000	2,080,000
2011年度	1,000,000	300,000	1,300,000
2012年度	500,000	150,000	650,000
年度			
年度			
総計	3,100,000	930,000	4,030,000

研究分野：慢性看護学

科研費の分科・細目：看護学・臨床看護学

キーワード：血液透析患者、食事管理行動、態度、尺度開発

1. 研究開始当初の背景

<透析室における看護者の患者教育の現状>

透析患者は年々増加傾向で、2007年末で

282,622人と昨年比で47,503人増加しており、人口百万人あたりの患者数は2,213人である。また、糖尿病腎症の透析患者が全体の43.2%と約半数近くに達しており、慢性腎不全の管理に加えて、糖尿病の管理を必要とす

る患者も増加している。透析室において、看護師は腎不全と糖尿病の双方に対する教育も必要となり、看護師の患者教育は以前に増し困難さを呈している。また、透析施設は全国で 4072 施設があるが、全ての施設で管理栄養士や薬剤師が常駐しておらず、多くの施設で看護師がシャントや日常生活における指導に加え、食事や薬物に対する教育を行っているのが現状である。もちろん、管理栄養士や薬剤師など他職種も専門性を駆使し患者教育を行っているが、それを総括して把握する立場にあるのが看護師ではないかと考える。そのことから、透析室での看護師の患者教育に対する役割は多岐に渡り、さらに患者の日常生活に即した質の高い患者教育能力が求められるのが実状である。

<食事管理と態度について>

血液透析患者にとって、食事は治療とも直結する行為であり、健常者が行う食事とは大きな違いがある。また、不適切な食事や水分管理は心不全や高カリウム血症など生死にも直結し、透析患者の死因の 1 位は心不全である。

食事は生まれてから継続して行われている行動であり、マズローの生理的欲求の根源をなすことから、食事を治療食中心とした行動に変えるための患者教育は容易でない。健康教育の領域では、個人の行動変容のため、必要な知識の習得と理解、並びに望ましい態度の形成が必要とされている。健康日本 21 の栄養・食生活に対する取り組みでも、行動変容のために態度レベルの目標が設定されている。しかし、透析室の看護師は必要な知識の習得や理解のために患者教育を行っているが、態度の形成を意識した患者教育を行っているとは言いがたい。また、透析患者の食事管理に対する態度の報告は我々が調べた範囲では見当たらなかった。そこで、行動変容支援に際し、態度形成に向けた介入は重要であることから、血液透析患者の食事管理に対する態度を明らかにすることやその態度を測定できる尺度の開発は重要であると考えた。

<食事管理に対する態度に関する国内外の研究と知見>

態度とは、「人や事物、社会問題に対してもつ、一般的で持続的な、肯定的または否定的な感情」であり、感情、認知、行動の 3 成分をもつ。また、態度と行動の関係では、Kraus が行ったメタ分析により態度と行動の相関関係は平均値が+0.38 であり、態度から将来の行動をある程度予測できたと報告している。すなわち、態度は持続的な感情で

あることから、態度形成に向けた介入を行うことで行動が持続すると考える。

国内の食事管理に対する態度の研究は、摂食態度調査(Eating Attitude Test:EAT-20)という神経性食欲不振症患者の臨床症状をもとに作成された尺度があったが、質問項目に「食べた後に吐く」があることから、本研究が目指す食事管理に対する態度とは相違がある。また、国外において血液透析患者の食事・水分制限のアドヒアランスに対する態度を測定する尺度が開発されていた。しかし、これは海外で開発された尺度であり、食事に対する態度は文化の影響が強いことから日本人の特性を如実に表すことは難しい。そのことから、国内外において血液透析患者の食事に対する態度を明らかにしている研究や効果について検証されていないのが現状である。

2. 研究の目的

血液透析患者の食事管理に対する態度を質的研究にて明らかにし、その質的研究の知見を基に、維持期にある外来血液透析患者の食事管理に対する態度を測定できる尺度の開発および信頼性と妥当性を検証することである。

3. 研究の方法

<質的研究>

*研究デザイン：エスノグラフィー

*対象：外来通院中で慢性維持血液透析を受けており（維持期：透析導入半年以上経過）、今までに食事に関する指導を受けた経験がある患者 10 名

*対象施設：平成日高クリニック(群馬県高崎市)、公立南丹病院(京都府南丹市)、永仁会病院(宮城県大崎市)

<量的研究>

1. 質的研究から得られた知見を参考に、尺度開発に向けたカテゴリと質問項目の検討。

2. 血液透析患者の食事管理に対する態度尺度の開発および信頼性・妥当性の検証。

*対象：外来通院中で慢性維持血液透析を受けており（維持期：透析導入半年以上経過）、今までに食事に関する指導を受けた経験がある患者約 1000 名

*研究方法：

①質問項目の抽出：質的研究から明らかとなった構成要素を元に、血液透析患者の食事管理に対する態度尺度の開発に至る質問項目を抽出し、質問紙を作成する。尺度の項目に対する評価は6段階のリッカートスケールを用いる。

②内容妥当性の検証：透析看護に精通する看護研究者、看護師、栄養士間でディスカッション

を行い、抽出した質問項目の内容妥当性を検証する。また、Inter-rater reliability と content validity index も使って内容妥当性を検証する。

③予備調査:内容妥当性の検証から抽出された initial item について、6段階で回答を求める(強くそうである、そうである、ややそうである、どちらでもない、ほとんどそうではない、ぜんぜんそうではない:1~6点に得点化する) 調査用紙を作成して、約 100 名の患者に回答してもらう。質問項目は、答えにくさや表現のわかりにくさについて意見を求め、質問項目の削除と表現の修正を行う。また、天井効果や床効果の項目も検討し、質問項目の内容を再検討した後に、原案を作成する。

④本調査:研究者および研究補助者が、外来通院中である慢性維持血液透析を受けており(透析導入半年以上経過)、今までに食事に関する指導を受けた経験がある患者に、内容妥当性の検証、予備調査の結果後に抽出された質問項目と同時に、基準関連妥当性の検証のための尺度(POMS 短縮版、批判的思考態度尺度)を調査用紙として配布し、データ収集を行う。対象者数は、サンプルサイズの測定に従い決定する。

⑤構成概念妥当性と基準関連妥当性の検証:基準関連妥当性のために調査用紙回収後、患者の基本属性(透析歴、透析に至った原疾患、合併症の有無・内容など)ならびに、臨床的データ(リン、カルシウム、カリウム、血清アルブミン、総タンパク、ヘマトクリット、ヘモグロビン、PCR、体重増加率(中2日間)の1ヶ月間平均値、ドライウェイトなど)について、患者、施設長の同意を得てカルテより情報収集する。構成概念妥当性の検証は、探索的因子分析および確認的因子分析を行う。探索的および確認的因子分析は、AMOS16を使用する。さらに、モデルの適合度は、 χ^2 検定、CMIN/DF、RMSEA、CFI、NFI、NNFI、IFI を使用する。また、基準関連妥当性の検討のために、態度尺度と検査データ、POMS 短縮版、批判的思考態度尺度との相関分析を行い、SPSS16.0 を使用する。

⑥信頼性の検証:信頼性の検証のために、test-retest 法と、クロンバック α 係数の算出、item analysis を行う。これらの分析には、SPSS 16.0 を使用する。対象者数は約 100 名である。

3. 研究期間

群馬大学医学系研究科長承認年月日から平成 27 年 3 月 31 日とする。

*対象施設(予定):平成日高クリニック・日高リハビリテーション病院(群馬県高崎市)、桃仁会病院(京都府京都市)、近江八幡市立総合医療センター(滋賀県近江八幡市)

4. 研究成果

<質的研究>

質的研究は、研究方法は、エスノグラフィーを使い、9名の透析患者および家族の自宅にてデータを収集して、さらに、半構成的面接も行って、参与観察および面接データを分析記録とした。その分析記録から、態度の用語の定義に基づき、コードを抽出した。その後、コード間の関係性の考察からカテゴリを抽出し、さらにコアカテゴリを抽出した。最終的なコアカテゴリは8つのカテゴリであり、態度の3成分である「感情」「認知」「行動傾向」に加え、「文化」が関係すると考えられるコアカテゴリも抽出された。また、それらのコアカテゴリの関係性から、図解化を行った(図1)。これらのことから、明らかになったことは、行動傾向として患者は生を受けてから、現在に至るまで【透析導入前の習慣を元にした食事をしている】。しかし、透析が導入されたことで、【透析導入前の習慣を元にした食事をしている】に加えて、【透析導入以来、体調や合併症を意識しながら食事をしている】。患者は日々食事管理行動における様々な経験や実践を行っていく。透析導入当初の厳密な管理は人によっては苦痛であり、元々の食行動に戻る対象もいた。だが、最終的に、本研究対象は元々の食行動に、食事管理を意識した食行動を融合させていった。そして、participants は最終的に現在の検査データが良好につながる無理のない、現在の食行動を形成させた。現在の食行動とは、【食事管理を意識せず、長年蓄積された経験に基づいて、調整した食事をしている】ことである。すわなち、経験によって習得した食事管理に対する勘を活かして目分量で管理できるようになった。目分量での管理は、検査データや体重測定の値で大丈夫であるか確認することで、その管理に自信が付き、安心へと繋がっていた。

感情と認知は、【快の感情を大切にし、透析を前向きに考えている】と【透析には辛い感覚が伴うことを感じている】の2つのコアカテゴリがあった。透析を続けていくうえでやはりつらさは伴う。そのつらさは自己管理を行わないと増すことから、自己管理を行うという必然性につながる。しかし、つらさばかりが続くと疲弊し、良好な自己管理につながるための食習慣を継続することは難しい。そこで、そのつらさと拮抗して、快の感情を大切にしたい前向きな考えがあるので、つらさとのバランスを保つことができている。これらは検査データが良好となる、無理のない、

食事管理を常に意識しない食行動への原動力になっていた。これらの行動や感情、認知のベースとなっているのが、【日本の旬を味わう食事をしている】と【家族が寄り添い、思いやりを持って支えあっている】、【健康に良いと思った情報を信じている】である。対象や家族は食事を行う上で、季節の野菜を使った料理を大切にしていることから、旬が影響していた。また、医療者や非医療者、メディアからの助言や情報は、食行動に影響していた。対象は医療者の情報を厳守したり、メディアが流した情報を食事に取り入れていた。また、日々食事や生活をともにする家族の協力や支えは食行動に影響していた。このように、【日本の旬を味わう食事をしている】と【家族が寄り添い、思いやりを持って支えあっている】、【健康に良いと思った情報を信じている】は態度の3成分である感情や認知、行動傾向に影響していた。このことから、この3つは流れではなく、態度の3成分のベースになって、感情や認知、行動傾向に影響していた。これらの結果については、研究論文としてまとめ、Journal of renal care に掲載予定である。

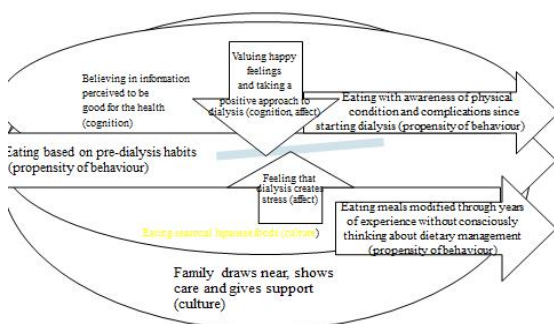


Figure1 The structure of a desirable attitude toward dietary management actions for a haemodialysis patient

<量的研究>

質的研究で得られた結果を基に尺度項目の検討し、現在データ収集を開始している。尺度は、4つの下位尺度(感情・認知・行動傾向・文化)から構成された合計39項目となっている。さらに、妥当性の検証のために、POMS および批判的思考態度尺度、検査データも同時にデータ収集を行っている。調査対象者は、プレテスト、本調査、再テスト法、3つの手法で合わせて、おおよそ1000名を予定している。すでに本学およびデータ収集機関での倫理審査も通っている。データ収集機関は、群馬県、滋賀県、京都府の4透析施設である。近日中に尺度の最終的な信頼性および妥当性を検証し、最終的な「外来血液透析患者の食事管理に対する態度尺度」を開発

予定である。尺度の開発後は、速やかに国外の学会誌に投稿する。また、投稿後はこの尺度を基に、食事管理行動に対する患者教育を進めるための、アセスメントツールの開発を進めていく予定である。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文] (計10件)

1. Onbe H., Oka M., Shimada M., Motegi E., Okabe A., Motoi Y. Characteristics of attitude formation that nurses need to consider when educating hemodialysis patients on dietary management. Journal of renal care; in press; 2013. 査読有
2. 海野琴美, 茂木英美子, 岡美智代, 宮田洋子, 恩幣宏美他. A 病院糖尿病療養相談室における患者満足度. Kitakanto Med J. 62 : 315-321. 査読有
3. 千田寛子, 堀越政孝, 武居明美, 茂木英美子, 恩幣宏美他. 成人看護学実習における看護学生の抱える困難感の分析. 群馬保健学紀要. 2012; 32 : 15-22. 査読有
4. 上星浩子, 岡美智代, 高橋さつき, 恩幣宏美他. 慢性病教育における EASE プログラムの効果—ランダム化比較試験によるセルフマネジメントの検討—; 日本看護科学学会誌. 2012; 32(1) : 9-16. 査読有
5. 恩幣宏美, 岡美智代, 滝口成美, 近藤ふさえ, 患者教育研究会. 行動変容を支える. Nursing Today. 2011 ; 26(6) : 34-38. 査読無
6. 恩幣宏美, 瀧川薫, 岡美智代. 糖尿病腎症から透析となった患者における障害受容の因子とその構造. 日本看護研究学会. 2011; 34(2) : 31-38. 査読有
7. 辻村弘美, 武居明美, 堀越政孝, 恩幣宏美, 越井英美子, 神田清子, 岡美智代, 森淑江, 二渡玉江. 成人看護学実習における看護基礎技術経験度に関する検討—看護基礎教育カリキュラムに向けた技術項目の調査から—; 群馬保健学紀要. 2011; 31 巻 : 9-16. 査読有
8. 小松実恵子, 恩幣宏美, 岡美智代. 糖尿病腎症患者における糖尿病治療・療養中断に対する思い. 日本保健医療行動科学学会年報. 2010; 25 : 196-208. 査読有
9. 安田真知子, 恩幣(佐名木)宏美, 荒木陽子, 池田友子, 武居明美, 岡美智代, 神田清子, 富田耕彬. 在宅療養を望む終末期がん患者の看護—主介護者に焦点をあてた支援の検討—. 日本透析医学会雑誌. 2010;

- 43(5): 467-472. 査読有
10. 宮田洋子、岡美智代、恩幣宏美、鬼形はる子、佐藤未和、井川八重子、高橋さつき、諸田了子. 看護支援によるストレス軽減の分析- Cox の看護モデルによる検証-. 北関東医学; 2010, 60 (2): 163-168. 査読有

[学会発表] (計 14 件)

1. Hiromi Onbe, Michiyo Oka et al. Characteristics of attitude formation that nurses need to consider when educating hemodialysis patients on dietary management. 2013 Hawaii International Conference on Education, 2013.11.8. Hilton(ハワイ、米国)
2. 佐竹明美, 恩幣宏美他. 糖尿病看護に携わる看護師の臨床における看護活動の実態. 第 17 回日本糖尿病教育・看護学会学術集会, 2012. 9. 30. 国立京都国際会議場(京都)
3. 恩幣宏美, 岡美智代他. 血液透析患者の食事管理行動における望ましい態度の特徴-感情と認知に焦点を当てて-. 第 38 回日本看護研究学会学術集会, 2012.
4. 岡部紋子, 恩幣宏美他. 血液透析患者の水分管理の実態-エスノグラフィーを通して. 第 57 回日本透析医学会学術集会・総会, 2012. 6. 24. 札幌市教育文化会館(札幌市)
5. 恩幣宏美, 宮田洋子他. 糖尿病合併妊娠患者への血糖コントロール維持に向けた看護の振り返り. 第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会, 2012. 5. 18. パシフィコ横浜(横浜)
6. 塚田尚子, 恩幣宏美他. 認知症を併せ持った高齢糖尿病患者の家族が、血糖コントロール支援を継続できる家族機能. 第 55 回日本糖尿病学会年次学術集会, 2012. 5. 18. パシフィコ横浜(横浜)
7. 宮田洋子, 恩幣宏美, 越井英美子, 井川八重子, 鬼形はる子, 岡美智代. 重症低血糖を繰り返す患者と家族への支援を振り返る- 家族との共依存関係にある患者との関わり-. 第 16 回日本糖尿病教育看護学会, 2011. 9. 25. 東京ビックサイト(東京)
8. Emi Yamada, Tomoe Inoue, Kazumi Oda, Takako Kobayashi, Yuko Hayashi, Hiromi Onbe, Etsuko Yokoyama, Hiroko Shimomura, Teruko Kawaguchi. Action Research Using the Nursing

Model on Education: Study Meetings and the Study of Nursing Practice Facilitated by a Staff Nurse (CNS). Sigma theta Tau International. Cancun.

9. 恩幣宏美, 岡美智代, 阿部年子, 島田美樹子, 岡部紋子, 本井裕二. 血液透析患者の食事管理行動における態度の基礎的研究. 日本透析医学会雑誌 Suppl, 2011; 44(1) : 718.
10. 高橋さつき, 上星浩子, 岡美智代, 恩幣宏美, 原元子, 村瀬智恵美, 茶田美保, 宮下美子, 杉田和代, 柿本なおみ. EASE プログラムを用いた CKD 患者教育の基礎的研究 1-費用分析-. 第 30 回日本看護科学学会学術集会プログラム 2010. 東京
11. 上星浩子, 岡美智代, 恩幣宏美, 高橋さつき, 原元子, 村瀬智恵美, 茶田美保, 宮下美子, 杉田和代, 柿本なおみ. EASE プログラムを用いた CKD 患者教育の基礎的研究 1-行動や自己効力感への影響に関するランダム化比較試験-. 第 30 回日本看護科学学会学術集会プログラム 2010. 東京
12. 道重文子, 仲前美由紀, 恩幣宏美. 血液透析患者の口渇と対処方法についての縦断的調査. 第 7 回日本口腔ケア学会総会・学術大会 2010. 11. 27. 大阪
13. 岡部紋子, 恩幣宏美, 島田美樹子, 岡美智代. 群馬県の血液透析患者の水分管理と食文化について. 日本保健医療行動科学学会プログラム・抄録, 2010; 50. 群馬

[図書] (計 1 件)

岡美智代、恩幣宏美. 病態整理ビジュアルマップ 3. 2011; 医学書院: 127-133.

[産業財産権]

○出願状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:
種類:
番号:
出願年月日:
国内外の別:

○取得状況 (計 0 件)

名称:
発明者:
権利者:

種類：
番号：
取得年月日：
国内外の別：

〔その他〕
ホームページ等 なし

6. 研究組織

(1) 研究代表者

恩幣 宏美 (ONBE HIROMI)
群馬大学・大学院保健学研究科・講師
研究者番号：20434673

(2) 研究分担者

なし

(3) 連携研究者

なし